

ネットの安心・安全シンポジウム：

ICTの安心安全な利用に関する意識啓発・情報モラル教育の在り方

— GIGA スクール構想を次のステージへと進めるために —

2021年8月31日（火）に当財団主催の「ネットの安心・安全シンポジウム」をオンライン開催しました。GIGA スクール構想により学校教育における ICT 利活用環境整備が進展しており、学校や家庭において児童生徒がタブレットやスマホに触れる機会が増えています。その中で、安全・安心にかつ有効にそれらを使っていくためには、安心・安全な利用のための普及啓発や情報モラル教育をどのように進めていくべきかを行政、学識経験者、学校のそれぞれの立場からディスカッションを行って頂きました。

登壇者（敬称略。所属・役職は当時のもの。）：

【コーディネーター】

兵庫県立大学 環境人間学部 准教授

竹内 和雄

【パネリスト】

総務省 情報流通行政局 情報流通振興課 情報活用支援室長

赤間 圭祐

文部科学省 初等中等教育局 情報教育・外国語教育課長

板倉 寛

和歌山大学大学院 教育学研究科 教授

豊田 充崇

神戸市立渚中学校 教諭

原田 大

日本放送協会 解説委員

三輪 誠司

一般財団法人マルチメディア振興センター 専務理事

永野 浩介

以下にシンポジウム模様を報告します。

■はじめに

竹内：兵庫県立大学で教職を担当して 10 年、困っている子どもたちへの対応が専門です。もともと中学校の教員で、教育行政にも 5 年いた関係で、子どもたちの生の声にはずっと接してきました。今日は、「ネットの安心・安全」というテーマで、特に子どもたちに焦点を当てています。



子どもを取り巻く環境が激変しています。1980 年ぐらいは、日本の場合は専業主婦が圧倒的に多かった。共働き世帯の人が子どもに鍵を渡して、鍵っ子と言われて、珍しい状況でした。それが 2020 年には完全に逆転している状況です。

平成 29 年、5 歳児でネット利用は 37%、9 歳児は 66%です。けれども、4 歳児は、実は 40%で、5 歳児よりも多いのです。是非はともかく、育児にも利用されている。これが平成 30 年度、1 年後にはなんと 68%で、3 割も増えている状況です。何か大きな変化が起きています。

最近の特徴の1つは低年齢化です。乳幼児期から情報端末に接するようになってきました。さらに「GIGA スクール構想」で、小中学生が学校で1人1台情報端末を持ち、授業や宿題で使うようになりました。しかもコロナ禍で、家から出られない子どもたちの利活用が加速しています。オンライン授業、ネット通販、リモートワーク、…。いろいろな状況があります。これまでのネット対策は、制限や禁止を主にしました。これからは利活用を前提として課題克服に努めなければなりません。新しい時代です。

今日は、最前線で活躍しておられる6名の皆さんが集まって、議論していただきます。皆さんはそれぞれの所属を背負っていますが、個人としてぜひお話ししていただきたい。

## <<パネリストからの発表>>

### ■文部科学省 板倉課長

板倉：2018年に実施されたOECDの生徒の学習到達度調査(PISA2018)の結果では、国語、数学、理科の授業で1週間のうちのどのくらいICT等を利用しているか見たときに、日本がOECD加盟各国(37か国)中最下位でした。また、ネット上でチャットをする、1人用ゲームで遊ぶに関しては、実はOECD加盟各国中1位、「コンピューターを使って宿題をする」という項目は、また37か国中最下位でした。日本は、ICT機器に関してはまったく遜色ない保持率があるが、その使われ方が極端にエンターテインメント等に偏っている状況にあります。

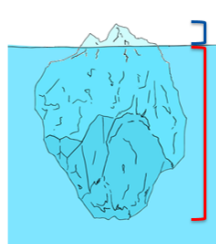


新学習指導要領を、特に教育のスタンダードとして、GIGAスクール構想ともども進めています。今は社会の変化が複雑で予測困難になっている。AI、ロボティクス、IoT、SDGsなど、いろいろな変化が起きているなかで、変化を前向きに受け止め、社会や人生、人間らしい感性を働かせて、より豊かなものにしていくことが大事になってきます。学習指導要領において、これからの学校には、一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが求められると記載されています。学習指導要領は、児童生徒の資質・能力を育成していくという考え

### 全ての教師が1人1台端末を利活用した実践を行うための取組

すべての教育委員会・学校・教師が、新学習指導要領の趣旨の実現に資するよう、端末・ネットワークを活用し、児童生徒の資質・能力の育成を図ること

#### 現状(イメージ)



1人1台端末環境での実践にある程度蓄積がある自治体 **約4%**  
(令和2年9月までに整備済み:4.4%)

令和3年度から本格的に1人1台端末環境での実践を行う自治体 **約96%**

・令和2年10月～12月に整備: 18.2%  
・令和3年1月～2月に整備: 27.5%  
・令和3年3月に整備: 47.5%  
・令和2年度内は未整備: 2.4%

この部分の底上げが必須(全体を水面より上に押し上げて行く)

※同時双方向オンライン指導を実施した学校設置率は15%(令和2年6月時点)

#### 取組の視点

- 多くの学校・教師にとって、パソコンルームから番殺の教室での1人1台端末の「番殺使い」は、初めての試み。最初からパーフェクトということはなく、試行錯誤が大切
- 各教育委員会(は、GIGAに関する情報発信や教員研修を実施して学校現場をサポートすることが大切)
- 地域の実態に応じた教員研修を支援し、実施体制等のサポート状況を把握し、フォローを充実
- また、情報交換プラットフォームの構築等を通じて、自治体間の横のつながりを強化し、お互いに助け合い、協働・自走できる体制を構築

方でできており、そのため、授業改善をしていく必要も、個別最適な学び、協働的な学びも一体的に充実していく必要もあるということです。GIGA スクール構想は、ICT 活用の特性・強みを生かして、この学習指導要領が目指す姿を実現していくのが、重要なポイントになります。

文部科学省としては、令和3年3月、個人情報保護とクラウド活用、ICT 活用指導力の向上、情報モラル教育等の充実、保護者や地域等に対する理解促進、健康への配慮、などを留意事項として、全国の教育委員会等にチェックリストとして示しています。

目の健康に関して具体的に、画面との距離を 30 センチ以上、30 分に1回は 20 秒以上画面から目を離して遠くを見て目を休める。就寝1時間前からは、ICT 機器の利用を控える。児童生徒が自らの健康について自覚を持ち、リテラシーとして習得することなども留意事項として掲げています。

あわせて、保護者との間で、事前に確認・共有しておくことが望ましいポイントに関して、ルール、健康面への配慮、個人情報の扱い方、トラブルが起きた場合の連絡や問合せ方法等の情報共有の仕組みについても、情報提供しているところです。

GIGA スクール構想の状況は、蓄積が一定程度ある自治体が約4%で、96%の自治体はこの春から始まったところです。今はとにかく試行錯誤して、最終的にはお互いに助け合い、協働・自走できる体制を構築していくことが重要と考えています。そのためにホームページ等で、誰でも活用できる優れた事例等の情報提供をしているところです。

## ■総務省 赤間室長

赤間： 総務省では、保護者や教職員の活用に資するために、インターネットに係るトラブル事例の予防法等をまとめた「インターネットトラブル事例集」を、2009年度より作成・更新して公表しています。2021年版では、著作権や、SNS等での誹謗中傷などのトラブル事例などを収録しています。この「インターネットトラブル事例集」は、学校の授業、教職員研修等で、さまざまな活用の方法があり、教育現場でも好評をいただいています。



安心・安全なインターネットの利用を啓発することを目的として、新たなサイト「上手にネットと付き合いおう！ 安心・安全なインターネット利用ガイド」を、3月に開設しています。本サイトは、青少年、保護者、教職員、未就学児の保護者、あるいはシニアに向けてコンテンツを掲載しています。全世代型の ICT リテラシーに係る啓発サイトの内容となっていて、「旬」のトピックを「特集」として掲載しています。

高齢者、あるいは低年齢層の保護者向けの啓発も重要と考えています。スマートフォン等の普及により、安心・安全を促進していく重要性が高まっているので、保護者向けの啓発教材に係る調査研究の成果を、前述の啓発サイトにも掲載しています。

青少年のインターネット上の危険・脅威に対応する能力とその現状等を見える化するために、これらの能力を数値化するテスト指標である ILAS（青少年がインターネットを安全に安心して活用するためのリテラシー指標）を開発しています。2012 年度から毎年、高等学校 1 年生を対象として、このテストとアンケート等を

併せて実施しています。昨年度は、協力を得られた 74 校の高等学校に実施して、集計、分析しています。全体の正答率は、過去 5 年間の結果を上回っています。

学校でインターネット利用上の危険について教えてもらった人は、教えてもらわなかった人に比べてスコアが 10 ポイント近く高い結果が出ています。また、家庭でのルールがある人は、家庭でのルールがない人と比較して、若干正答率が高いという結果が出ているので、青少年の意識啓発という部分では、家庭でのルールづくりが重要であり、保護者への啓発が必要と考えています。

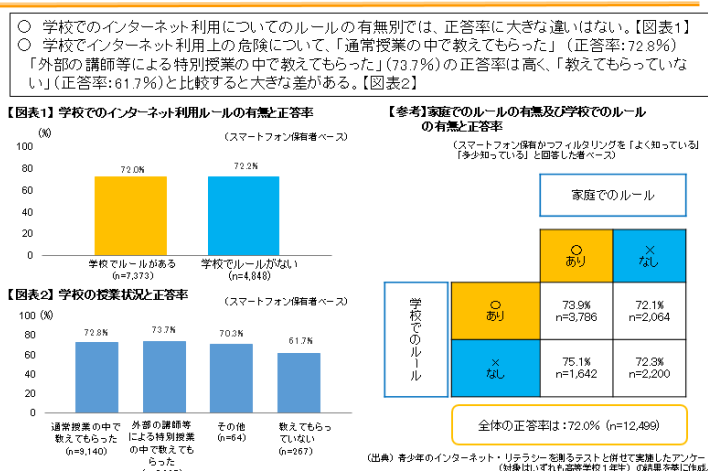
GIGA スクール構想によって端末の整備が進んでいくなかで、青少年のインターネット利用が、社会生活や学校生活を営むうえで、必然、当然のものになることが想定されます。環境変化に伴い、青少年による違法有害情報への接触を回避するためのフィルタリングの利用促進も当然必要ですが、青少年がインターネット上のサービスを利用することを前提とした環境整備をしていく必要があると考えています。

## ■マルチメディア振興センター 永野専務理事

永野：当財団の取り組みで e-ネットキャラバンという出前講座をやっています。メニューとして、小学校、中学校、高校、あるいは保護者・教員向けにも用意しており、内容として最近起こったことも含めて、取り組んでいます。昨年はコロナの影響があり例年の約半分の実施件数で 13 万人ですが、それまでは 2,660 件、約 50 万人の方々の受講をいただいています。現在は一昨年並みに進捗しています。リモート講座というオンライン講座も整備して、その比率が徐々に上がっています。

「情報通信の安心安全な利用のための標語」について、毎年標語を題材に表彰をおこなっています。昨年が 2 万件の応募ですが、全国小中高 35,000 校ありますので、まだ認知不足かなと思います。兵庫県が応募全体の 4 分の 1 を占めるほど活発な一方で、そうでないエ

高校生のインターネット利用実態とILAS結果(クロス集計)  
(学校での学習やルールと家庭でのルール)



リアもあり、もう少し認知不足を補う活動が必要と思っています。

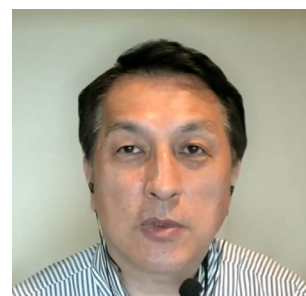
これまではトラブルの未然予防を中心にしてきました。けれども、トラブルに見舞われた場合にはどう対処するのか？ 1人で悩んで抱えるのではなく、相談窓口もあり、具体的な法的手段はどうするのかとか、こういうふうに鎮火作業としてできますとか、きっちり

教育課程のなかで接することができるように、取り組んでいく必要があります。

ネット社会になりフェイクニュースの影響が出てきます。フィルターバブル、ミスリード、この辺りはインターネットで検索しますと、ネットエンジンはアルゴリズムがある程度後ろで動いていますので、本人が知らない間に、フィルターのかかった、限られた、かつ偏りのある情報（バブル）に囲われてしまうことになりかねない。この辺りはモラルと共にリテラシーを高めていくことも必要だろうと、情報リテラシー教育とか、家庭への支援とかも充実する取り組みをしたいと思います。

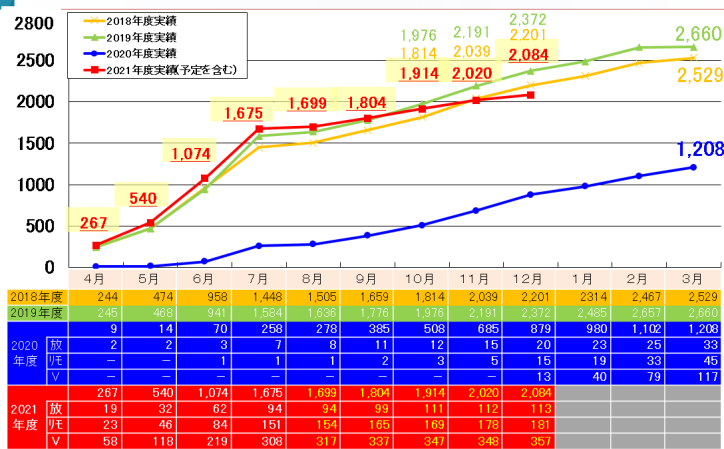
### ■NHK 三輪解説委員

三輪：今年4月、NHK 総合テレビの「みみより!くらし解説」という番組で取材したことを紹介します。東京都の子どものネットトラブル相談を受け付ける、「こたエール」というサイトがあり、昨年度は相談件数が非常に多くなったということで、相談員に聞きますと、新型コロナウイルスの影響で子どものネット利用の増加があり、トラブルも増加しているようです。



例えば、SNS で自分になりすまされた投稿が拡散しているとか、いじめで自分の悪口を言う SNS グループがあることを友達がかっそり教えてくれた、これを先生に言っているのかしら？とか、けっこう難しい相談も多いようです。なりすましに関しては運営会社に削除依頼を出すとか、いじめの関係ではスクールカウンセラーに相談となるのですが、子どもだけで対応するのは非常に難しい事案になります。親とかが出て来ないといけなわけです。しかし、子どもは親や学校に言えないからネット相談にきているようです。普通の親子のコミュニケーション、親子の信頼関係が、トラブル対応では非常に大事で、欠かせないと思います。

『e-ネットキャラバン』実施件数(累計)



【受講者数】 2018: 約47万人、2019: 約51万人、2020: 約13万人、2021: 約31万人(8/27現在)

All rights reserved ©FMNC 2021

スマホのやりすぎで生活リズムが乱れてしまう、どうしたらいいかという相談もかなりあるみたいです。家庭でどうインターネットを使っているかに一回注目したほうがいいと思います。親が常にネットに触っていると、子どもも日常的に触るのは当たり前です。一番身近な親のネットの使い方を一回見直す必要があると

思います。この解説をしたら、同僚とかもはっとさせられたと、話していました。

取材をして、詳しい親ほど年齢に応じて子どものネット利用を制限、管理している印象を持っています。有名どころでは、スティーブ・ジョブズさんとか、ビル・ゲイツさん、子どもにはスマホを触らせないようにしたとか。寝る前や食事時のスマホは禁止する、親も食卓には持ち込まない。ルールをつかって、みんなで守っていこうという話をしているというのです。ネットの利用ルールは、家族でいろいろ話し合う前に、どういうふうにネットを使わせるかということ、親が考えを持つことが非常に重要と思います。

ネット利用と言ってもさまざまで、SNS やゲームをする、調べ学習をする、プログラミングをする、インターネットやコンピューターというのは、いろいろな使い方があります。どう使うかだけでなく、何のためにするかというその背後を考える必要があります。SNS やゲームは交流や暇つぶし。調べ学習の背後には、情報収集、真偽判断です。フェイクニュースとかは、プロのジャーナリストも非常に苦勞する分野です。これからの時代は絶対に必要なスキルだと思います。プログラミングは、職業訓練や創作活動ということになります。背後にあるもの、目的を、それぞれの使い方に応じて親も考えていくということです。つまり、可能性と危険性を、親も一緒に考えていくことが、まずは前提かなと思います。

#### ■和歌山大学 豊田先生

豊田：私は、いろんな授業を提案して、そのための教材を開発をしています。自分が実践できない授業は提唱しないというスタンスで、今でも出前授業や検証授業を自ら行なっています。私が公開している「明日から即実践できる情報モラル」のサイトでは教育現場で拾いあげた声をマンガ教材にしたものをダウンロードできます。官公庁とかでは出せないような、お上品で

#### 相談窓口寄せられた「ネットいじめ」の例

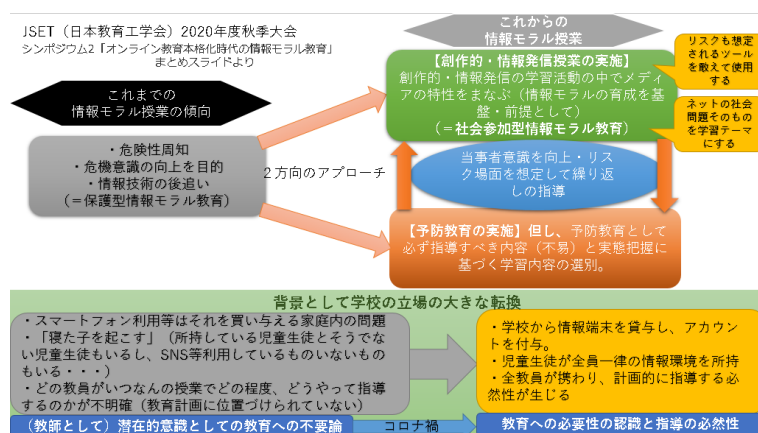


「親や学校に言えない」という子どもが多い  
親子のコミュニケーション・信頼関係が大切



はないような話（笑）も提供しているサイトなので、ぜひアクセスいただけたらと思います。<http://web.wakayama-u.ac.jp/~toyoda/mrl2/>

さて、図にありますように、これまでの情報モラル授業は、危険性周知とか、危機意識の向上を目的とし、情報技術の後追いといった傾向がありました。これを保護型情報モラル教育、つまり子どもたちを守るための情報モラル教育だったわけです。もちろん、こうい



った今までの予防教育も重要だけれども、1人1台 GIGA スクール構想になったら、創作的、かつ情報発信を実施する学習活動のなかで、メディアの特性を学んだり、情報モラルの育成を進めていく。つまり、社会で通用する、実際の社会での情報を、全員が SNS 等を使って発信していくのを前提に、社会参加型情報モラルに移行していく必要があるかと思えます。

これまで情報モラル教育は、体育館に集めて講演を聞く、もしくは道徳や特別活動で、紙面による指導というのが一般的だと思います。これからは、自分の GIGA スクール端末を使って、体験的に学ぶことができるので、実感を伴った指導が可能になると思えます。例えば、うわさ話がどのように SNS で広がるかを仮想体験した児童は、実感を伴って SNS の特性を学ぶことができるようになるはずです。

実践事例「ピクチャーカード作り」という取り組みで、校内のお気に入りスポットの写真を撮るわけですが、「写すと良くないものは？」と問いかける場面があります。子どもたちは、「人が特定できるような写真」とか、「車のナンバー」等と答えました。Google ストリートビューでは、車のナンバーが写っていないことに児童らが気づいていました。学校の隣の家の洗濯物が映らないようにとくに気をつけようという児童もいました。なぜそんな配慮がいるのかということ学ぶ大事な場面であると言えます。実は GIGA スクール端末の「カメラ機能」の使い方を教えながら、生きた情報モラルと一緒に学んでいるのだと思います。

研究校の話ですが、コロナ禍で音楽ができないので家でリコーダー演奏動画を撮って提出するという課題がありました。撮影映像は、顔出ししてくる子、顔は切っている子、後ろを向いている子、横を向いている子、画面がない子とか、いろいろありました。みんなに聞いてみると、「恥ずかしい」という感覚が人それぞれ違うんです。クラスのなかでさえも顔出しは嫌という子もいれば、別に抵抗ないよという子も様々でした。感覚の相違とか、オンラインの抵抗感とかを、こういった場面でも、実際の生きた指導画面として、効

果的ではないかと思いました。

私の昔の記事「道徳ジャーナル」の 97 号に、情報モラルって危険性だけじゃなく、判断力や心構えが重要で、学校で情報モラルをやる意義は、共感、許容といった感覚を身につけられるところが大きいと書かせていただきました。ようやく、この GIGA スクールによってそれらが日常的な使用の中で、認められてきたかなと思います。

最後に、大阪のある中学校で、英文のスピーチをアップロードして、みんなで評価している場面です。みんな建設的に意見を出してくれる一方で、ふざけた発言が出てくるわけです。しかしながら、この学校では授業に邪魔な発言とはみなさないです。こういった授業中のふざけた発言を取り上げて指導することで、「生きた情報モラル指導場面だ」と考えて、そういった指導に挑むわけです。SNS の教育利用のデメリットを、発想の転換でメリットにもすることができるという事例かと思っています。

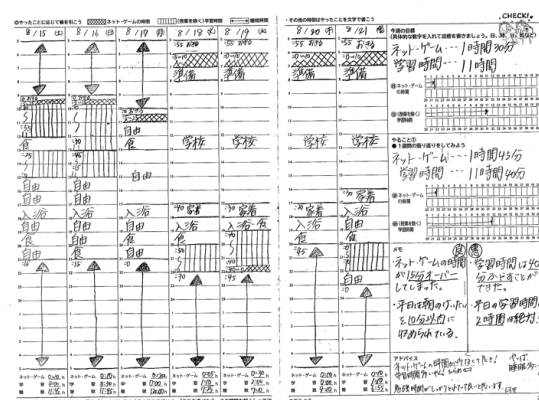
### ■神戸市立渚中学校 原田先生

原田：実際、学校現場としてはどんなことをしているのか、渚中学校の例で紹介させていただきます。

本校でも、インターネット、SNS のトラブルが顕在化していますが、これまではどうしても、教師からの一方通行ということが多かったです。2017 年から今年で 5 年目ですが、「情報モラル育成プロジェクト」と題して、自主的に考えるルールづくり等を目的として取り組んでいます。そして、他校種、小学校、他の地域の中学校、他の高校、年齢層が異なる人との交流や、竹内先生が主催しているスマホサミット等に参加することによって、ブレークスルーと言いますか、個々の変容が大きかったです。また、携帯事業会社、警察、地域の商業施設等と協力しながら取り組んでいます。



タイムマネジメントですが、生徒たちが一日の生活の中で、特にネット関係の時間を考えて記録して、週末には時間を取り、お互いに意見を出し合っ、良いところ、悪いところを共有して、翌週につなげるという取組です。生徒の声としては、一日の生活が目に見



えるかたちで時間の使い方を振り返ることができた、自分の生活の改善点がわかった、勉強と遊びのけじめをつけることができた等がありました。意外なのが、遊んでいるときの罪悪感が少なくなったという意見もありました。



3年前に、当時の生徒会を中心に、携帯・スマホ「渚中学校 10 のルール」を決めました。生徒たちの行動も変わってきており、3年に一度変えていこうと、2学期からやる予定にしています。

いろんなワークショップに参加しただけにとどまらないで、全体に共有しようということで、生徒会を中心に、生徒が教師になって他の生徒に教えるという活動もしています。毎年生徒会が、スマホやネットのトラブルについてのビデオを作っています。その後には全校生に広めましたが、代表生徒がその台本を検討して決めました。

スマホサミット等に参加して、いろんな意見を交換することによって、様々な視点から考える機会となり、新しい発見があります。小学校にも行っていますので、情報発信の広がりがあり、本校はSDGsにも力を入れていますので、その関連づけもしています。

課題としては、保護者との連携・協力が不可欠なので、それをどうしていくか、コロナ禍でどのような手段、方法ができるのかを模索しているところです。

GIGA 端末を本校でも4月から本格的に導入しているのですが、まだまだ手探りの状態です。1学期末にアンケートを採ってみました。だいたい4段階で3.2、おおむねGIGA端末を使って良かったということです。私は社会科でデジタル教科書を使っているのですが、デジタル教科書と紙の教科書はどちらが使いやすいかと聞いてみますと、デジタルが30%、紙が70%で、ちょっと意外でした。まだまだ紙の教科書が使いやすいという思いがあるようです。新しいGIGA端末を使用すると便利な面と、やはり困ることも出てきますので、2学期以降みんなでルールを決めていこうということで終わっています。

## <<ディスカッション>>

### ■テーマ1：ネット利用の課題

竹内：印象的だった総務省の赤間室長、感じているネット利用の課題を話してください。

赤間：子どもたち自身がインターネット上で情報発信する局面が増えてくる。そのときに、ネット上の誹謗中傷により自分が知らない間に加害者になってしまうとか、あるいは著作権のような社会のルールに抵触してしまうとか、様々なリスクがある。リテラシーであったり、ルールだったり、モラルだったりを学ばないと、対処していけない。子どもがネット上で発信することに対して、いろいろと目を向けなければいけないし、気配りしなければいけない。

予防的アプローチとしてフィルタリングも当然大事だと思うのですが、例えば、携帯とか、スマホとかは、大人が使ったものを子どもに貸し与えて、そのまま使わせている場合があるわけです。子どもが使うときにはフィルタリングが当然議論になるけれども、大人が使ったものを子どもに貸し与える場合は議論にならないで、何の制限もない端末を子どもがずっと使っているといったことが起きるわけです。

竹内：情報発信をするので、加害者側に回ってしまうという問題提起。それから、使用済みスマホ貸与問題。私が大阪で調査したところ、小学校3年生が一番使う情報端末はスマ

ホです。親からももらった使用済みスマホがいっぱいある。そこにはフィルタリングが入っていない。とても重要な問題です。最前線で長く来られた、豊田先生はどうですか。

**豊田：**いろんな学校を回って見て、課題の1つは、情報の信憑性を判断する力の育成です。自分の危険を守るという点でも、調べ活動や、社会に出て生活に必要な情報、今のコロナのうそを見抜くとか、全般に必要なだと思います。

情報の判断をする場面が、どの学校でもほとんど取られていない現状があります。ネットの情報の切り貼り、いわゆるスクリーンショットを撮って、トリミングして貼りつけるという技術ばかり上手になっている。インターネットは子どもたちの都合のいい画像素材集、情報素材集という感覚になっていると思います。この事例は、「大阪の特産品とその特徴を調べよう」という授業なのですが、実は、この授業の目的は、「信頼性の高い情報を探す方法はどうするのか」なのです。学習指導要領には、情報活用能力の「育成」と「発揮」というフレーズが出てきますが、これは情報活用能力としての検索能力の「育成場面」なのです。育成をきっちりやってから、発揮場面に移行するという考えが見えてきます。

小学校ですが、信憑性が高い情報ってどういう情報かとか、いつ、誰が、何のために発信している情報かとか、実はアドレスを見たらどこが発信しているかわかるよ、みたいなことを先生が指導して、子どもたちがしっかりノートに取っています。子どもたちは、こういうことを知りたかったということです。3年生ぐらいから調べ学習が始まるので、しっかりと指導すべき項目として設定しないといけないと思います。

情報を見抜く目、イコール情報の信憑性を判断する力の育成が今求められているにもかかわらず、端末の使い方に注力がいってしまい、なかなかこの指導に手が回っていないことが課題かと思います。

**竹内：**今の問題の中核部分だなと思います。信憑性判断、これは、教えているようで教えていない。ネットが情報素材集になっているのは聞いていて面白かったですね。三輪さんはどう感じられましたか。

**三輪：**信憑性判断のところは最優先どころか、これだけわかっておけばいいかな、というテーマだと思います。NHKのなかも、インターネットでどういう情報が飛び交っているかをパトロールするチームがあり、24時間、365日、一般の人のつぶやきがどこまで信用できるかを、かなり脇を締めてやっているところです。1人がつぶやいているだけの話は信じないとか、画像が出てきても100%それだけで信じない。画像を加工して載っている人もいます。メディアが取りあげることを楽しみに流していることもあり、それには絶対に踊らされないことが必要になってくる。もともとの情報のソースはどこかが大事になる。巨大掲示板に書き込むという時代、みんなが元ネタはどこだっぴやりとりしていた。それが今、感情的に「いいね」とか、リツイート、みたいな話になっている。昔の人の脇の締め方は、今の人たちにも知ってほしいと思います。

**竹内：**文科省等が、昔からそのあたりの重要性を指摘してきました。板倉さんはどう感じ

ましたか。

**板倉：** PISA という学力調査のなかで、日本が昔から、テキストの質と信憑性を評価する問題が苦手だと言われています。例えば広告であれば、一定程度これは宣伝だと思って読まなきゃいけない。疑って読むことが必ずしもできていないのが課題です。テレビも、放送する前にファクトチェックをして、校正して、正しいかどうかを見ている。このインターネットの時代になって、詠み人知らずみたいなものも存在するわけで、従前よりも疑って読むことが大事になる。言語能力や読む力はもちろん、情報活用能力もまた大事になるという考え方で、文科省として今は動いているところです。

**竹内：** 社会全体でネットの利活用が急激に増えたことは歓迎すべきと思いますが、使い方が雑で荒い大人もいます。原田先生のところの中学生は、自分達で情報発信をしています。今の課題をどのように感じておられますか？

**原田：** 子どもの主体的な取組であるか、教師の一方通行になっていないか。お互いに意見交流ができるような環境づくりが一番重要で、大人の協力が必要です。大人は変化に対応することが苦手で、子どものほうが、知識が豊富にあります。実は子どもが教師になって、Instagram とか、Twitter を使ってみようと、教師に教える機会をつくりました。

中学生の子たちは、大学生とか、高校生に話を聞くと、大人よりも身近なのでよく話をします。子どもと保護者の壁というのは一番の課題です。子どもと保護者が一方通行ではなくて、双方向で話し合う機会を本校では設けていますが、保護者の考え方、情報リテラシーが千差万別で、どういう方向性がより生徒にとって良いのか、課題であると感じています。

## ■テーマ2：対応の方向性

**竹内：** 子どもたちは、ネット上の情報発信だけでなく、いろんな方法で発信しています。中学生が教師に教えたり、小学生に教えたり、保護者に教えていくなかで、より情報発信へのリテラシーが高まったという理解でいいですか？ 中学生が教師に教えるって画期的ですが、どんな雰囲気になりました？

**原田：** 教師は年齢層が広いので、わかる人もいれば、まったくゼロからの人もいました。生徒も教師の気持ちがわかったと言っていた。新しい発見もあったので、生徒のためにも、教師のためにも勉強になる機会になったと思います。

**竹内：** いろんな場面で情報発信をさせることが、実は一番の学びになって、そのなかで失敗する子どももいたりする。その失敗から学ぶという、そういう方向性ですね。

**原田：** トライアンドエラーはもちろん起きます。生徒自身が教えて、自分の思いどおりにならずに落ち込んでいる場面を何回も見ました。そのなかで、お互いに話し合っって変えている現状はあります。やはり自分たちで学ぶことが非常に大きいと感じます。

**竹内：** 私は 2012 年に、高校生が教員研修で、先生にネットについて教える場面に関わりました。新聞の一面に「子どもが先生にネットを教える」と出ました。そうしたら、「子

どもに教師が学ぶのはいかなものか」「教師の威厳がなくなる」と、教育委員会に批判の電話が行ったのです。反応に驚きましたが、時代がちょっと早すぎたんだと思います。子どもから学ぶ、失敗から学ぶ、この辺が鍵ですかね。

**豊田**：学習指導要領にも、情報モラルのところ子どもの実態を把握するという文言があって、適切な対処をしていくとありますので、実態を把握する点では、子どもから学ぶことは必然なのかと思います。子どもがなぜはまり込んでいくのかを、まずは実態把握で理解を示し、対応策を考えていくのは一つのサイクルと思います。

**竹内**：一つの方向性が見えてきたと思います。教員が指導するとき、子どもの実態を踏まえてやる。足し算ができないところに割り算は教えない。それなのに、情報モラルだけは、子どもの実態を踏まえずに、大人の思いをぶつけています。そこでミスリードがあるのです。文科省の言う「主体的な、対話的な深い学び」をするためには、まずは子どもの実態把握が必要です。板倉さんはどうですか。

**板倉**：未然防止も重要であり、やはり発達段階を踏まえた対応が必要であると思います。小1、小2の時点と、高1、高2、高3の時点では全く異なり、学習の主導権は、上に行けば行くほど自分でやっていくことになります。また、ルールメイキングの話も同じと思います。上に行けば行くほど、子どもが中心になってやっていく。最終的に子どもは、自立を目指して教育をしているので、より大人に近い世界になればなるほど、情報活用能力を発揮する場面も多くなり、責任もできるだけ持たせることになる。それが大きな方向感だと思います。情報モラルに関しては、この年齢段階でこのくらいのボールを渡したほうが良いという議論が行われている最中だと思います。子どもがまだできない部分に関しては、家庭・保護者が一定程度責任を持っていただきつつ、子どもが主導権を握ることができるように、議論していく部分だと思います。

**竹内**：だんだん子どもに任せていかないといけないのです。赤ちゃんにルールをつくらうと言っても無理だから、大人が使用時間等、決めないといけない。しかし、高校生に頭ごなしに言っても聞きません。大学生になると、そもそも下宿している学生も多く、親の声が届かない。発達段階に応じた指導ということですよ？

**赤間**：自分の子どもがスマホやタブレットをいとも簡単に動かせるようになっている。この学年だったらこの程度できていい、という考え方はあると思います。フィルタリングも、発達段階に応じていろいろなレベルでかけることができるようになっている。その辺の理解がないと、いろいろなソフト、アプリが使えなくなるため最初の導入でみんな外してしまうとか、入らないという話になってしまう。フィルタリングの対象をいろいろカスタマイズできることをちゃんと周知しないとサービス自体を使ってもらえないので、予防的なアプローチの観点でも、その発達段階というのは当然重要になってくると思います。

**竹内**：日本はガラケーの時代は、フィルタリングで課題をいったん克服しましたが、スマホになって、フィルタリングだけではうまくいかなくなってきました。早いうちからの保護者主導の制限がもちろん必要で、そこから子供自身が判断できるようにしていく。だんだ

ん変わっていく、グラデーションのようなイメージですね。

**豊田**：思春期の子たちにとっては縛られるものだから、フィルタリングとか、ルールづくりという2つの言葉は、生徒たちには反発の対象キーワードになっている。私は言い方を変えて、マイスマホ「ベストセティングワーク」です。今日のワークは制限するというイメージがなくて、自分のベストなセティングを考えるのが良かったと、感想文にも書いてくる。子どもに聞いてわかったので、やっぱり実態把握は大事と思います。

**竹内**：子どもにどう伝えるかはノウハウが必要ですね。私は、全国30カ所ぐらいでスマホやネットについて、子どもたち自身が考える「スマホサミット」を実施しています。去年ぐらいから、子どもたちは「僕らだけでは無理」「先生、大人も一緒に考えてほしい」「スマホの欲に負け、使いすぎてしまう」と言い出しました。

**原田**：ここ2年、自分たちだけでは限界があるのを感じている生徒も増えてきている。親も協力してほしい、一緒にしてほしいと。

**竹内**：中学生に保護者への要望を聞くと、「スマホを見ずに私を見てほしい」と言い、びっくりしました。子どもたちは、親子でちゃんと向き合って、一緒にルールを作ってほしいと言います。「親も、大人も一緒に考えよう」がまさに今の議論の中心です。

**三輪**：子どもが受験勉強をしなくちゃいけないのにスマホを使いすぎてしまう。どうしたらいいかという相談をしている。自分で問題だとわかっているけれども、やめ方がわからない。SNSで雑談をしすぎて抜けかたがわからないとか、試験のときだけやめるにはどうしたらいいですか、スマホを預かってもらう方法はないですかとか、ネットに関する相談もけっこうあるそうで、子どもたちもわかっていると思います。親も子どもを制限するルールという話じゃなくて、やはりネットの、スマホの利用のエチケットを親子で一緒にやってみようと。親もご飯を食べながらスマホをするのはやめようと、寝室や食卓に持ってくるのはやめようという話を一緒にするのは、すごくいいと思いました。

**竹内**：ネットのつながらない瀬戸内海の離島に、ネットに課題のある子を20人連れて行って、4泊5日、寝食を共にしました。中学生は「ネットのやめ方がわからない」「4時間やり続けてしまう」と相談すると、高校生が「フロリダを使え」と言います。

**豊田**：「風呂なので離脱します」、ということです。

**竹内**：中学生は、「フロリダはいいな、毎日使う！」と喜んでいました。子どもたちは、そういうノウハウを求めています。

**永野**：子どもたちの発信の機会も増え、子どもたちも、大人と同様にネットの森にいろいろと分け入って、果物を取ってきて、毒になるものもあり、それをどうやって覚えていくのかという時代に入ってきたと思う。e-ネットキャラバンをやっていて、成長段階ごとにメニューは用意しているけれど、教えるだけだとぜんぜん入っていかない。ルールづくりに対して反発が来る。小学校3～4年ぐらい、もはや1～2年ぐらいかも、まではまだ聞いてくれる。それ以上大きくなると、ほとんど伝えることは知っている。具体的に何なの？ という辺りに移ってきている。子どもたちの発信も増えて、体験している人も増え

ているので、ここ5年ぐらいで変わったなという感じです。

**赤間**：子どもたちが興味関心を持ってくれるような情報発信を、大人もしていかなきゃいけない。この点について、実際に保護者の方とか、学校現場の先生方がどう思っているか気になっている。例えばPTAでいい先生が来て、子どものネット利用のことを話してくれますとなったときに、そこに来る保護者の方って限られていて、来る方自体はすごく熱心な方で、むしろ本当に話を伝えたい人というのはそこに来ない人だと思うのです。そういう人たちも含めて、どうやって啓発したらいいのかということが、常に突き当たる問題だと思います。

**竹内**：講演に来ない親問題。来る親はどんどん賢くなる。来ない親が本当に問題です。

**原田**：核心を突いている。中学校現場として温度差はすごく感じます。熱心にフィルタリングされている保護者もいれば、子ども任せになっている保護者もいるのが現状です。学校現場としても、難しい対応だと感じています。

### ■テーマ3：(家庭への) 支援策

**竹内**：保護者が買い与えるので、私はネットの問題は一義的には家庭の問題とと思っています。親として、大人としてどう子どもを支援するか。

**永野**：ネットとかスマホの、検索のような使い方は、子どもたちはすぐに覚えます。どのように、ネットの森のなかで生きていく、活用していく、大きなトラブルに遭わない、自分の可能性を広げていくのか。それには、体験して失敗したっていい。1人で失敗すると人知れず、ずぶずぶの沼にはまってしまうので、友達とか、大人とかも、一緒に体験していく機会を増やさないといけない。親にも、先生にも、あるいは地域社会の大人にも一緒にやる機会を増やしてもらおう。見られているところで失敗して、そこで習熟度があがる。

**竹内**：今は、ちょうど反抗期と重なる時期にスマホを持ち始める子が多いです。だからいうことを聞かない。低学年から持たせて舐けていく、というのも一つの手かもしれません。

**三輪**：家庭ごとに意識の差が大きいのは、どうやって解決していくのかと思いながら聞いていた。小学生からスマホを与えて、野放しにすることは、親の責任放棄じゃないかという気はしている。どの年齢で何をやらせるか。何を学ばせ、何をやらせないのか、例えば、生活のリズムがめちゃくちゃになることはやめさせたいとか、知らない人について行って性的ないたづらをされることにならないようにしようとか。それは、親として子どもを守るために、ネットというくりじゃなくて、どういうことをやってもらいたい、やらせたくないのか。被害に遭わせないというところは、今も昔も基本的に変わらない。今はネットの時代だからより難しくなっているが、本当に大切なものから話をしたほうがいい。

**竹内**：まったく同感。ユニセフは、ネットは道路と同じだと言います。使わなかったら事故は起こらないけれど、使わないわけにはいかない。さらに重要なのは、交通ルールを守っても、交通事故で年間2,000人近く日本では死んでいる。どこまで許容するか、許容しないのが重要かもしれません。もちろん、ネットで死者が出てはいけません。私たちの

対策次第で何とかできるからです。

**豊田**：この前、「小学生がしてみたい習い事1位」で「動画製作」というニュースが出ました。以前は YouTuber になりたいとか、e スポーツプレイヤーとか出てきていたのですが、どんどん変わってきていますね。

12年前になりますが、PISA のデジタル読解力調査で、日本の子どもたちは、マルチメディア作品をつくる、デジタルの作品をつくるのが、とても苦手だと出ました。苦手と言うよりも機会がない。授業カリキュラム上、そういった機会がないことが大きな問題になっていて、世界でダントツの最低になっています。GIGA スクールに寄せた文部科学大臣メッセージには、創造性を育むというのがあって、一番のキーワードが創造性なのです。GIGA スクールでは重要なキーワードといえますが、最も簡単な創作活動である「タブレットで絵を描く」といったシーンもあまり見ることはありません。タブレットでお絵かきしてオリジナル作品をつくる、もしくはドラえもんとかアンパンマンを描き出すところで、著作権にアプローチできる。なのに、絵を描くということがほとんどされていません。コンピューターグラフィックスから一種の創造性が生まれてくるはずが、この部分があまり実施されていません。創作活動によって、いろんな情報モラルに関連する指導の必要性が生まれてくるけれども、そこが乗り出せていない。

この事例は、和歌山市の子どもたちが、和歌山市特産の「生しぼりジンジャー」を紹介・発信する映像製作をしている場面です。地域の特産物を PR するための映像づくりを家でやっていたら、すごいことをやっているなと親が思うわけです。

学校には、実は情報発信の場面がすごくたくさんある。自分たちのクリエイティブな面が、どんどん発揮されてくる。この部分をもっと GIGA スクールの端末を使って、子どもたちの創作的活動につなげていければと思います。

もう1つ小学校の事例ですが、地域の和菓子屋さんを紹介するために、学校アカウントを取って、子どもたちが発信している場面です。こうなると、発信に責任を持たないといけません。下手なことを書いたら、逆に客が来なくなるかもしれません。なので、しっかり調べて、しっかり同意形成して、しっかりと宣伝していくという活動をしているわけです。SNS って、本来はこんなふうを使うんだと認識した子どもたちは、SNS でいたずら動画を投稿したり、人の誹謗中傷をするツールとしては、使わないはずですが。

**竹内**：格好いい、クール、がキーワードだと。不細工な禁止、規制じゃなくて、より格好よく、スマートに、がいいということですね。

**板倉**：これまで家庭では、SNS にしろ、学校からは見えないところで使っていたわけです。豊田先生の「ネットスラングみたいなものを使っているのが生きた教材だ」はすごく重要な観点だと思っていて、学校のなかで、そのスラングを教材にしてみんなで議論していくのは、先生が見えなかった部分が目の前に挙がってきて、非常に大きいかと思います。学校では安心して失敗して、みんなで議論して、より良いものをつくっていくことも大事だと思います。情報発信でも、学校が関係すれば、学校の先生と一緒に発信していくことに

なります。なかで議論をする話と、外で話をするというのが違うことも、実体験を通じて学んでいくことが大事です。GIGA スクール構想の一つの意義は、学校でそういうところが取り扱えることであると思います。保護者の方との連携についても、常に情報のやりとりをしていくことが大事であると思います。

**原田：**ここ数年、中学生と接しているなかで、地域に貢献したり、何か役に立ちたいという思いは、今までよりも強くなってきていると思います。

**竹内：**クールに、ネットも格好よく使うという機会にしないといけないと感じました。

皆さんの議論が納得しすぎて質問が来ていないそうです。普通は、こういうところでは言わないようなところまでできたので、とても面白かったです。

### ■おわりに

**赤間：**皆さんの話を伺って、自分の子どもがスマホやタブレットを使っているのを眺める感覚がだいぶ変わってきましたので、自分自身が食卓でスマホを使ったりしないように心がけたいと思います。

**竹内：**まずは大人が格好よくクールにネットを使う。私たちの社会が成熟していかないといいません。

**板倉：**GIGA スクール構想によって、今まで学校のなかで見えなかった部分が見えてきたところがあります。リアルな人間関係がネットの社会にも広がってきていて、全体を一つの生き方として捉えていきながら、GIGA スクール構想によって、そこをうまく引きあげて見える化して、学校のほうでも把握し、そして保護者は保護者として、一人の親として、どういうふう子どもと向き合うか考えていくことが大事なのかと思いました。

**三輪：**メディアとして情報発信するのは仕事ですが、情報発信することが本当に恐ろしい。ものすごく脇を締めた情報を出しますので、ネット発信することを躊躇するところはちょっとあるんです。NHK も、最近は積極的にネットで発信していこうとなっているけれど、どのようなことをしたら炎上するとか、リスクがあるのかを、勉強会をやりながらやっている状態です。プロの世界でもそういう状態なので、学校現場とか、一般の方が悩むのは当然だと思います。社会全体も、やり方、テクニック、モラルも含めて、いろいろ考えながらやっていく、まだそんな段階なのかと思いました。

**原田：**明日から2学期ですが、早速生徒に還元できることがたくさんあったと思います。生徒は非常に忙しいです。親御さんとの会話は少なくなっている現状もあるので、大人がいかに関わるかが、子どもの成長につながると思います。教師に何ができるかと、一つヒントをいただきましたので、今後に生かせたらと思います。

**豊田：**従来の教科指導の延長としての「デジタル教材」の個々の活用というのは、皆さん乗り出している。従来の紙媒体をデジタルに置き換えての実施は、多くの学校で達成されていると思います。なので、インターネットのリスクとか、感覚の相違というものを集団のなかで学ぶ意義を、「自動車教習所の路上演習としての学校の役割」としてもっとでき



たらしいと思います。創作的活動のなかでこそ生まれる「情報モラル」の重要性というものがあある。作品をつくって発信してこそ、著作者としての理解や責任を感じることができまます。この辺りを GIGA スクールでもっと広められたらなと思ひました。

**永野**：子どもたちが成長するのに、体験を大人も共有できる機会を増やしたい。家庭のなかでも、社会のなかでもそういう機会を増やす一翼を担えるように活動できればいいと思ひます。身近な学校教育現場の接点を持たせていただいて、e-ネットキャラバンの講師の方々とコミュニケーションも取って、身近な課題も一つ一つクリアしながら、並走できる、伴走できる活動を充実させていきたいと思ひます。

**竹内**：例えば、ある中学校で、あるアプリの紹介画面を表示して、「これをネットからダウンロードしていいか」と尋ねると、見た瞬間に男の子が、「ダメダメ、メモ帳なのに電話帳にアクセス許可を出してる。個人情報抜かれるのに絶対ダメ」と言ひます。一方、フィルタリングを設定してもらっている女の子はきょんとして居ます。自分でアプリを入力できない設定なので、考えたこともないと言ひます。純粋培養で守ってあげることがいいのか、悪いのか、考えなければならぬ時代になって居ました。どこかで教えてあげなきゃいけません。どこかで大人が責任を持って教えなきゃいけないのです。また、重要なのはルールの作り方です。ネットのルールを作ったときに話し合いがあると、小中高、みんなルールを破らないです。自分が納得するからでしょうね。ネット依存のような状態に陥る子も少ないですが、高校生になると関係なくなります。高校生になったら遅いのかもしれません。どの年代にどうするかという、閾値とかあるのかもしれません。

有識者と言われる人が、先日「Twitter を小学生から教えて使い方を学ばせるべきだ」と話して居ました。Twitter 社は、規約で小学生に使わせないことに居しています。規約違反を大人が勧めるわけにはいかないと私は思ひます。日本の大人が責任をもって考えていく必要があると思ひます。GIGA スクール構想によって、日本では小中学生が学校で、一人一台、情報端末を使っています。本気で考える時期です。大人だけでは無理です。子どもだけでも無理です。大人と子どもが一緒になって、社会全体で考えていくことが必要です。

今日は、6名の皆さんに質の高いお話をさせていただきました。皆さんが、総務省や文科省の方々含めて、ご自分の言葉で持論を述べていただき感激しました。各省庁含めて、みなさんが、しっかりネット問題に向き合っておられるからだと思ひました。皆さんと一緒に話ができて、とても楽しかったです。ありがとうございました。(終了)